神様のおもちゃ箱

仁科治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様のおもちゃ箱

【Ｎコード】
Ｎ１０９１Ｌ

【作者名】
仁科治

【あらすじ】
タンスの上に小さな白い包みがあった。骨が入っていると義母は言った。
その日の義母の顔を私は忘れられない。涙で半分閉じられたような薄い瞼から白目が私を睨んでいた。

4　「お前のために私の赤ちゃんを殺した」

4　「お前のために私の赤ちゃんを殺した」

中学二年になったころ、父と義母に引き取られ、Y県の外れの岬近くで暮らすようになった。祖母は私を手元におきたがったが、家の実権は叔母夫婦に移っており、気丈な祖母も従わざるをえなかったようだ。

冬になったころだろうか、義母が一週間留守をすることになった。理由はわからなかった。遅く帰ってくる父は、私に何も言わなかったし、私も聞かなかった。

義母は一週間分の私の着替えを用意して行った。私は義母から言われていたように、順番に着替えて汚れ物を笊に入れた。不便は感じなかったし、食事は近所の食堂ですませた。いつも通りのことだった。

義母が帰ってきた。私に話しかけず、台所に行った。笊の中をのぞき込んで、嫌な顔をした。私は台所の隅に着替えの笊を置きっぱなしにしていたのを忘れていた。義母は笊を床に放り投げた。

父は義母の帰宅を喜んでいるようだった。

翌日、学校から帰ってくると、家のなかが暗かった。買い物にでも行っているのかと思ったが、義母は炬燵に臥せっていた。

「お前の洗濯物をたたんでいたら、気分が悪くなったのだよ。嫌だと思うとよけいに嫌になるんだ。臭いしね。なんで、お前を引き取ったのだろうかね」

留守をする前の義母のようすに戻っていた。

学校から戻った私に、いつも義母は難癖をつけた。聞き流して本を読んでいると、それは納まるのだったが、その日は違った。

「お前は、なんであたしが家を空けたと思う。ばあさんは何も言っていなかったかい。そうだろうね」

私が黙っていると、私のほうに向き直って言った。
「病院にいたんだよ。赤ちゃんができたんだよ。私はほしかったんだ。でも、あのばあさんがおろせって言うんだ。お前が可愛そうだと。あたしはどうなんだ。せっかくできたんだよ。あたしの子どもなんだよ。なんで、お前のために」
義母が顎をしゃくった。
タンスの上に小さな白い包みがあった。骨が入っていると義母は言った。
その日の義母の顔を私は忘れられない。涙で半分閉じられたような薄い瞼から白目が私を睨んでいた。
義母は、いまも私を憎んでいるのだろう。
私を見つめて、ナンデ、オ前ノタメニ私ノ子ヲ殺サナレバイケナカッタノダヨ、そう罵っているような気がする。

それは、ヒルだったのだろう。洗面台で洗い落とそうとしている私の指先へ巻きついてきた。まるで血を吸いつくそうとするように執念深く離れなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1091l/

神様のおもちゃ箱

2010年10月17日13時16分発行